B 6　子供組にみられる教育観―親子分離の視点から―

岩手県立盛岡短大　○田中弘子

目的　近代以前の日本においては神事等の行事にみられるように地域の大人が設定する、子供の集団の行動が非常に豊かであった。子供組は、長い間、広範に行われていたその象徴的な例である。日本人の歴史的な子供観及び子供組の構造と村落内での位置については、1報、2報において考察した。本研究ではいわゆる近代的小家族がもたらす諸課題―家族の孤立，親子密着，子供中心など―を解くひとつの契機として，親子分離の視点から再度子供組にみられる教育観の考察を深めたい。

方法　文献・資料の省察の他，(1)宮城県柴田郡船岡町宮戸周辺における子供組のえんずのわり行事について直接現地調査（1987－1992年の主に12.1月）、(2)子供の遊びと年伝い（労働）の推移（1989年、宮戸小．藤尾小．金津中学（後者は角田市）の児童・生徒アンケート調査）について分析を行った。

結果　(1)子供組は村落内部の年令階梯に秩序づけられ、一般的には若者組の予備段階である。(2)土地の生業と古い民間信仰とを背景にしている　(3)お籠りと門祝いにおいて、子供内部の自治・統制，遊び・労働を体験するが、村人たちとの教育関係に立体的ともいえる教育の補服を確認することができる。(4)子供の日常の遊びと年伝いの、大正期からのおよそ推移比較では、親の労働への参加や一端を担う事例は60年代までみられる。(5)子供遊び、集団・自然・時間，および年伝いの（労働）を失っていくことと並行して，いわゆる近代的小家族の拘束を強めていくと結論づけることができる